近世後期の遍路日記に関する基礎的考察

――阿波商人酒井弥蔵の「旅日記」を例に――

西　聡子

はじめに

江戸時代は旅の隆盛とともに、旅に関する多くの記録が生み出された。かつては旅に関する諸記録について、「道中日記」・「道中記」[1]等の語が区別されずに混用されるなど、史料としての性格に十分注意が払われてこなかったが、近年では人々が実際に旅に赴いて日付や費用・訪問先等を記した記録を道中日記と呼ぶことが定着してきた[2]。他方で、①名所・旧跡に重点が置かれ、歌などが詠み込まれているもの、②年月日・宿泊地・費用及び若干のコメントが記してあるもの、③諸経費を中心としたものをあわせて旅日記と呼ぶ場合もある[3]。

これらの研究により、旅に関する諸記録の性格に対する認識が格段に深められた。例えば道中日記については、講中への報告や次に旅に赴く者の参考に供するために作成されたため、その作成には本屋から刊行された道中案内記等の情報が参照されたことが明らかになってきたのである[4]。参詣経路をめぐる研究[5]や、旅の習俗・女性の旅についての研究[6]、旅がもたらす知とその広がり等[7]に関する研究の進展も、道中日記をはじめとする旅の諸記録に関する史料的考察の深化と密接に関係していると考える。

ところで、旅の中でも四国遍路の旅で作成された記録である遍路日記については、右記のような道中日記についての研究の中ではほとんど考察の対象とはされていな

い。これまで、遍路日記については、「巡礼者自身が筆記した」「四国遍路の道中記」とされ[8]、九点か十点程度しか見つかっていないとも言われる[9]。こうした検討対象の少なさが研究の現状をもたらす一因となっていると見ることもできよう。さらに、四国遍路は、他の旅に比して「篤い信仰心」に基づいて行われ、観光的要素も少ないと指摘される等、近世の旅の中で特異な位置を占めていると理解されてきたことも関係しているように思われる[10]。

これに対して、二〇〇〇年以降の遍路研究の活発化にともない、新たに見出された「遍路日記」が複数にわたり紹介されるようになった[11]。支出記録が淡々と記されたものから、文章表現に創意工夫が見られ狂歌や画を付しながら書かれたものまで紹介され[12]、巡礼者自身の手になる諸記録を「遍路日記」と捉えて考察の対象とすることの必要性を示唆している。これまで、遍路日記の記述の中で関心が寄せられてきたのは、巡拝地である八十八ヶ所の札所の参拝経路や、費用、日数、接待（巡礼者に対する物品・金銭・宿等を提供する行為）の内実等であった[13]。しかし各々の遍路日記がどのような特徴を持って記されているのか、四国遍路以外の道中日記と比較して記述項目が違うのか等については十分に意識されていない。四国遍路と他の寺社参詣の旅との関連性や共通性を探る試み[14]をさらに発展させるためにも、遍路日記の基礎的考察が求められてきていると考える。

そこで本稿では、個別具体的な事例に即した検討を行って、遍路日記の史料としての特徴について考察してみたい。あわせて、近世の旅の中での四国遍路の位置についても展望したい。

第一節　酒井弥蔵の「旅日記」

（1）酒井弥蔵について

本稿で取り上げる阿波国美馬郡半田村の商人酒井弥蔵（一八〇八～一八九二）は、自身の旅に関する多数の記録を残した人物として知られ、遍路日記の著者として紹介されることもある[15]。事実、弥蔵が残した旅の記録には、後述の「旅日記」のほか、旅における金銭出納だけを記録した帳面[16]や、参詣した神社仏閣の名前を箇条書きにした「参詣覚」[17]等、多くの記録・書物が含まれているので

ある。「参詣覚」を分析した拙稿によれば、弥蔵は伊勢、高野山、畿内、安芸、出雲、讃岐、伊予など様々な場所へ寺社参詣に行っており、数日に渡る寺社参詣の旅（ただし旅に出る契機は商用であった場合もある）には、年三～六回程行っていた[18]。これは当時の民衆としては高い頻度で旅に赴いていたと考えられる。

一方で弥蔵は、「芭蕉をめざした男」とも言われ[19]、春耕園農圃という俳号を持ち、俳諧・石門心学活動を活発に行う人物であったこと、「記録魔」とも呼ばれるほど諸活動の記録を多く残したことでも知られている[20]。これらの記録は徳島県立文書館寄託酒井家文書と広島県福山市酒井氏蔵酒井家文書に含まれている[21]。

以上を踏まえ、ここで酒井家及び弥蔵について確認しておきたい。酒井家は「堺屋」と号し、弥蔵が慶應元年に書いた「堺屋先祖早繰系図」によれば徳島佐古町七丁目の町人堺屋吉左衛門を初代として元禄一五年（一七〇二）から半田村に居住した[22]。なお、酒井家の檀那寺は半田口山村にある龍頭山神宮寺（真言宗）である。

半田村は、吉野川の右岸（一部左岸）に位置する。吉野川の舟運により撫養・徳島・半田・祖谷を結ぶ物資の集散地に位置するという地理的条件により、商人や職人が多く居住した。村高は文化十年（一八一三）四四七石余[23]、旧高旧領取調帳によると四六八石余（うち蔵入地三七石余、残りは藩家老稲田九郎兵衛ら給人四人の知行地）、家数は安政三年に三六八軒、人数は九八四人である[24]。

弥蔵は文化五年に堺屋武助の長男として生まれる。大福帳を分析した真貝宣光氏によれば、弥蔵の生業は小野浜での川舟への積み込み・川舟からの浜揚げや運送（弥蔵はこれらを「運賃」収入としている）、他の商人に「雇れ」て配送業・出張代行業・委託販売業等（弥蔵は「日雇」収入としている）、さらに、「家徳」収入として農業生産物の販売（葉藍、荏胡麻、粉麦、鶉卵、飼葉、芋蔓、竹皮、笹皮、小竹、山草、棕梠皮、茶、麦、桑、麦種等）を行っていた。元治元年（一八六四）からは前年に病気をしたことでそれまでの「運賃」収入が減少し、それに替るものとして易筮による謝金が収入源の一つとなる。慶應元年からは従来の細々とした日雇い仕事に替り、半田村の商人敷地屋兵助[25]に「雇れ」、長期間出張するようになる[26]。このような生業形態により、弥蔵は「小売商」あるいは「雑貨商」であったと指摘されている[27]。

以上を前提に、次項で弥蔵の旅と「旅日記」の特徴について検討したい。

（2）弥蔵の旅と「旅日記」

酒井家文書に残された旅に関する史料の中で、特に注目されるのが、遍路日記『さくら卯の花旅日記』を含む一連の「旅日記」が現存することである。以下に掲げる一一部（天保一二年（一八四一・弥蔵三四歳）～安政五年（一八五八・弥蔵五一歳））がそれである。[28]

A『見る若葉聞く郭公旅日記』（天保一二年・弥蔵三四歳）
B『見る青葉聞く郭公旅日記』（天保一四年・弥蔵三六歳）
C『弘化二年乙巳春中旅日記』（弘化二年・弥蔵三八歳）
D『仏生会卯の花衣旅日記』（弘化三年・弥蔵三九歳）
E『踊見旅日記』（弘化三年・弥蔵三九歳）
F『散る花の雪の旅日記』（弘化四年・弥蔵四〇歳）
G『出向ふ雲の花の旅』（嘉永二年・弥蔵四二歳）
H『旅日記法農桜』（嘉永三年・弥蔵四三歳）
I『極楽花の旅日記』（嘉永四年・弥蔵四四歳）
J『梅の花見の旅日記』（嘉永五年・弥蔵四五歳）
K『さくら卯の花旅日記』（安政五年・弥蔵五一歳）

表題からも窺えるように、これらの「旅日記」は一般に道中日記として扱われる史料とは趣を異にし、一定の文芸作品的修飾が施された内容であることが予想されよう。また、これらは「他人に見せるため」[29]に作成された、すなわち、読まれることを前提とした書物としての性格を持つものと想定される。この中に含まれる遍路日記の史料としての特徴を考察するには、これらの「旅日記」全体の特徴をおさえておく必要がある。

そこでまず、どのような旅においてこれらの「旅日記」が著されたのか、という点について確認したい。【表1】は、この一一部の「旅日記」について、旅をした年月日、旅の契機、目的地、旅の同行者、行程・主な名所旧跡と寺社参詣記事をまとめたものである。四国遍路の巡拝地に指定されている八十八ヶ所の札所については太字で示した。この分析に基づき、最初に「旅日記」から読み取れる弥蔵の旅の概要を見たい。

まず、旅の契機と目的地である。旅の契機は、寺社の

【表１】「旅日記」一覧

番号	「旅日記」の表題	旅の期間［日数］	旅の契機	目的地	同行者	行程・参詣記事（**太字**は四国霊場八十八ヶ所）・名所旧跡記事
A	見る若葉聞く郭公旅日記	天保12年（1841・34歳）3月晦日～4月4日［5日］	五岳山善通寺開帳	讃岐国象頭山金毘羅大権現・五岳山善通寺	妻・姉（善通寺まで）	半田村→讃岐中通村→松尾町内ニ着仕ル、犬の馬場ゟ四厘･･･夫ゟ（象頭山）参詣仕」→是ゟ**善通寺**迄壱里半（開帳拝見、霊宝録購入）、巳ノ刻妻姉ハ我等と別れて是ゟ帰る」→善通寺出立仕、**曼荼羅寺**参詣仕、未の刻**本山寺**着、善通寺ゟ四里、観音参詣仕」→讃岐大野原村→「是ゟ箸蔵寺まで三里、則参詣」→「三日、今日ハ孫之丞芝居見物と用意仕･･･忠臣蔵にて面白く見物仕」→半田村
B	見る青葉聞く郭公旅日記	天保14年（1843・36歳）5月24日～29日［5日］	（石鎚山参詣）	伊予国石鎚山	川野屋浅之助・大泉利三郎・大道芳助・中島常次（毛田村で加わる）	半田村→「此所に弘法大師御杖を立置し旧跡あり、今其御杖椿と成り、枝葉茂りある也、寺有参詣仕る、世に爰を椿堂と言」→「雌鳥島・三島、町家なり、此所に三島明神の社あり参詣」→伊予西条城下見物→大町→「あんちう村・すの内村過て、たんと言所に里**前神寺**あり、此寺は石鎚山別当にて本堂蔵王権現、四国第六十四番の札所也」→「扨、成就に登り見れハ池有、爰にて手水を遣ひ参詣、石鎚山社本社・拝殿等あり･･･大悲蔵王権現・石鎚山蔵王権現・金剛蔵王権現　則礼拝仕」→**前神寺**・川の江八幡宮→和田の観音→讃岐金比羅大権現→半田村
C	弘化二年乙巳春中旅日記（※この「旅日記」は弘化二年の春中に行った旅の記録である）	弘化２年（1845・38歳）①正月29日～2月2日②2月8日～10日③3月11日～13日④3月26日～29日⑤月7日～8日⑥4月22日～24日	①金毘羅大権現参詣②象頭山金堂御入拂供養③象頭山開帳④象頭山開帳⑤「要用を兼なからも象頭山御開帳」⑥象頭山開帳	①讃岐国象頭山金毘羅大権現②象頭山金堂③象頭山④象頭山⑤象頭山・⑥象頭山・善通寺	④鼡友（大久保岩吉）⑥母・「国蔵殿末子源兵衛」	※行程は最初の旅のみ記載する（正月29日）金毘羅大権現→（2月1日）「夫より二月朔日に**西讃霊場六ヶ所**巡る」夫より**善通寺**に至り拝する･･･**甲山寺**・**曼荼羅寺**・**出釈迦寺**参詣仕、是より我拝師山捨身の嶽に登りて参詣･･･、**弥谷寺**に参詣･･･夕暮**本山寺**を参詣し、見て廻るに御詠歌の桜も花の景色なさなれハ　手折との花まだ咲ず本山寺」→西野村→（2月2日）半田村
D	仏生会卯の花衣旅日記	弘化3年（1846・39歳）4月9日～11日［3日］	宝物諸仏の開帳	讃岐国香川郡仏生山法然寺	なし	半田村→「夫より仏生山へ掛る、岩部より三里、八ツ半時なり、開帳を問へハ最早今日ハ開帳なり、･･･十日早朝支度仕、開帳に趣く」→「日ハ九ツ前なり、雨降出し漸いそき瀧宮に着ぬ、仏生山より三里、抑此所ハ、其昔菅公当国を治め給ひし旧跡にして、本地ハ祇園牛頭天王なり、法然上人旧跡も西手の河に数多有」→「八ツ時金毘羅に着仕、夫よりそこ爰参詣致」→「箸蔵寺へ参詣せんと内より思ひ定めしなれ共、大雨なれは帰宅をいそき」→半田村
E	踊見旅日記	弘化３年（1846・39歳）7月24日～26日［3日］	念仏踊の会式	讃岐国阿野郡瀧宮村祇園社牛頭天王并大日在天満宮	なし	半田村→「重清村三頭山を次手なからも参詣せんとて登る･･･三頭山権現奉拝して是より讃岐の方に趣く」→「夕暮、瀧の宮ニ着致して宿につく･･･夕飯仕廻、是より夜市を見物に出る･･･天満宮社有、拝殿に額を掛たり、菅公治所旧跡」→天満宮の東に弘法大師の御影堂西向ニ有、前に鳥居あり、夫■横町へ出るなり、五ツ時宿江帰りて寝所に入臥ぬ･･･廿五日早朝支度仕、両社共参詣奉拝･･･五ツ半時分踊入込其行れつ左之通り」→「是■金比羅へ趣き･･･夕暮参詣仕･･･廿六日早朝御本社伽藍不残参詣して北の方を眺めて　○見渡せハ海春／＼と今朝の秋」→半田村
F	散る花の雪の旅日記	弘化４年（1847・40歳）3月19日～22日［4日］	百味講	讃岐国善通寺	半田村百味講中11名	半田村→象頭山（金毘羅）→「百味講出席も早けれハ、是より霊場五ヶ所参りに趣、**弥谷寺**をさして行、則参詣仕･･･是より山越に**出釈迦寺**へ参詣す、奥院捨身山ハ、十三丁西の山上にあり･･･夫より**曼荼羅寺**へ参詣仕･･･夫より**甲山寺**を参詣して　君か代の春を笑ふや甲山　夫より**善通寺**参詣」→（百味講出席）「今宵ハ　大師様御宝前にて御通夜仕」→「早朝（3/21）、百味講中へ大師様の御開帳有、其跡にて御影一福闔取有、当り者三好郡昼間村高田忠助と申者なり･･･夫より方丈にて大僧正誕生院の御さつけあり、其跡にて七色の御宝物開帳あり･･･以上開帳相済、其跡にて百味の御膳の御時被下、扨、夜前夕飯より今朝迄、三度者茶漬被下候なり」、善通寺→（3/22）西野村→半田村
G	出向ふ雲の花の旅	嘉永2年（1849・42歳）3月11日～4月3日［23日］	神代神楽の見物	出雲国杵築大社	半田村22名	（3/11）半田村→（3/12）（讃岐）象頭山・**善通寺**、多度津→（3/13）（渡船）鞆の津→（3/14）「鞆津所々参詣」祇園宮・円福寺・阿伏兎の観音→（渡船）尾道（浄土寺・八幡宮・西国寺・大山寺天満宮・千光寺参詣）→（渡船）（3/15）三ツロ→熊野村氏神熊野大権現→（3/16）（渡船）→（3/17）（渡船）宮島　厳島大明神・奥院弥山→（渡船）広島→（3/18）東照大権現・八幡宮・饒津大明神・厳島御旅所→岩国→（渡船）→（3/19）広島江波入江→広島城見物→（3/20）三次・布野・室市→（3/21）石畑の町　須佐大宮→（3/22・～24）杵築大社・日の御崎兎大明神→（3／25）鱒淵山学円寺→秋鹿町→（3/26）佐陀大社・松江城内稲荷大明神→安来町→（3/27）米子→伯州大仙宮・大智明大権現→三ツ杭（御杙）→（3/28）久世→（3/29）木山宮→福渡→（3月晦日）吉備津宮・中帯江景光山観世音→（4/1）瑜伽大権現→下村　鴻八幡宮（渡船）（4/2）丸亀→象頭山（金毘羅大権現）大向→（4/3）半田村

H	旅日記 法農桜	嘉永3年 （1850・43歳） 3月18日～22日［5日］	（善通寺参詣、金光山仙龍寺の「（弘法）大師四十二歳厄除自作の尊像」参詣）	讃岐善通寺・伊予国金光山仙龍寺	半田村大坂屋嘉吉	（3/18）半田村→辻町→佐野村→（3/19）（伊予）「今治領分」→「金光山に着、参詣礼拝し･･･夫より**三角寺**参詣致し、同者の人三島明神参詣を望む故次手に三嶋へ趣く」→三嶋大明神→川之江→川之江八幡宮→「讃岐国丸亀領」→和田浜八幡宮「和田浜に至りて八幡宮参詣し、是より観音寺の方へ趣く･･･黒渕村通りて観音寺ニ着、**琴弾八幡宮・観音寺**共に参詣」→「一夜庵興正寺ハ足利尊氏公建立の寺也」→「是より**弥谷寺**へ趣･･･弥谷寺迄登り坂八丁、扨、弥谷寺ハ大師稚き時の御遊び場にて、種々の仏・菩薩を石に切付給ふ也、本堂本尊観世音、護摩堂は岩屋也、其□（他脱ヵ）多宝塔・位牌堂・鐘楼・庫裏・大門・中門等あり、奥院の岩屋ハ大師学問を被遊し所也、悉く参詣相済、是より**出釈迦・曼荼羅寺**へ趣く･･･**出釈迦・曼荼羅・甲山寺**等皆々参詣相済、七ツ時**善通寺**着いたし此所にて泊りと定る」→（3/21）「早朝、大師様伽藍等を参詣･･･夫より方丈にて百味講中打揃ひ、七種の宝物拝見相済、僧正の御真言をさづけありて、その后　大師様御宝前にて御開帳尊影の鬮取有り」→「是より金比羅の方へ趣く･･･榎井六條町興泉寺に開帳有り則拝見･･･夫より象頭山参詣」→（3/22）「廿二日早朝、金比羅大権現様を参詣」→半田村
I	極楽花の旅日記	嘉永4年 （1851・44歳） 3月20日～25日［6日］	正御影供・百味講	讃岐国善通寺	半田口山村井川鶴作（善通寺まで）	半田村→「夕暮**善通寺**に着」→「廿一日天気能く日和にて伽藍西院参詣･･･夫より講中打揃ひて今年は先　大師様御開帳して御宝前にて尊影の鬮取、其講中名面左之通」→「井川の鶴作は爰より帰宅と言ふ、我は是より東讃岐神社仏閣参詣に趣･･･夫より**金倉寺**、此所は智證大師御誕生の所にて御影堂に安置す、本堂は薬師如来也、次に**道隆寺**、此寺は多度津城主京極壱岐守様の御菩提所にて大地也」→「夫より**天皇**境内に入て参詣･･･此宮は天皇崩御被遊し時に金棺しハらく爰に置奉りし所也、今の宮有所也」→「扨、**白峰寺**は谷間にありて松・杉・柏生ひ茂り･･･昔時保元平治の乱に崇徳天皇当国に流され、此所に皇居し給ふ故に松山の御所と言」→「夫より八島の方へ趣、**八嶋（屋島）寺**、麓かた本村迄に川五ツあり」→「是■**八栗山**迄登り坂也、　源平の戦ひと見る躑躅かな　八栗山大門二王あり、中門二天あり、本堂御影堂南向」→「是より**志度寺**へ趣、東の岡に石の鳥居あり、此辺源氏の鯨と言、昔時義経此岡に登りて、源平両郡の気を見し所也、腰掛石もありと言ふ･･･志度寺大門二王あり」→「日内山へ参詣に趣く也、志度より一里･･･是より**長尾寺**へ半里余有と答ふ **長尾寺**は少しの町の中に有、南向、本堂の東に御影堂有」→白鳥大神宮→「是より**大窪寺**の方へ趣く、問へハ四里有と言ふ･･･次に大窪寺○本堂南向大師堂東向、后の山岩窟也、八丁上に奥の院有と聞、日暮此所にて一宿、是より当国脇町迄四里」→「廿五日、宿部より雨降出し止す、故に奥の院参詣ハ止て添山谷を脇町さして帰る」→脇町・半田村
J	梅の花見の旅日記	嘉永５年 （1852・45歳） 2月24日～2月28日［5日］	天満宮九百五拾年御忌	讃岐国滝宮天満宮	「春田宗三郎との春水子」	半田村→「七ツ時、瀧の宮に着して先参詣し、市の様子を見るに、人ハ散りてすくなけれ共、御本社の前に上り物多し」→「廿六日**国分寺**参詣」→「夫ゟ**白峰寺**参詣、松山千手院図」→「坂出村塩浜広し、家居もよき町家也、鵜足津町**道隆寺**参詣」→「是■松尾の方へ越く、与北村を過て山の上に櫛梨の神社を遙拝して七ツ時松の尾に至りて、金毘羅大権現様礼拝、夕陽の飯の山眼瞳殊によし」→半田村
K	さくら卯の花旅日記	安政5年 （1858・51歳） 3月24日～4月15日［21日］		阿淡両国の霊場	大道芳助	半田村→「**四国第十一番霊場金剛山藤井寺**」→「**四国第十二番霊場摩蘆山焼山寺性寿院**」→「建治の瀧本社蔵王権現其余仏菩薩あり、霊地也」→「**四国第十三番霊場大栗山大日寺花蔵院**」～「**四国第十六番霊場、光耀山千手院観音寺**」→「府中村明神社遙拝」→「**四国第十七番霊場瑠璃山明照寺真福院**」→「諏訪大明神遙拝」→「此所の西手に　一、丈六寺と言ふ禅宗寺あり、当国太守様を始、家老中老一家中の石碑あり」→「**四国第十八番霊場勝浦郡母養山恩山寺**」→「**四国第十九番霊場、橋池山立江寺地蔵院**」～「**四国第廿三番霊場、医王山薬王寺無量寿院**」→**本社津峯大権現・勢見金毘羅大権現・宮島金毘羅大権現・木津金毘羅大権現**→下福井村→徳島佐古→鳴門岡崎～（渡船）～福良（淡路島）　須本大明神→淡路西国33ヶ所・淡路49薬師霊場巡り→（渡船）鳴門岡崎・「**四国第一番霊場霊山寺**」～「**四国第十番霊場切幡寺**」→半田村

ｻｶｲ00081「見る若葉聞く郭公旅日記」、ｻｶｲ00082「見る青葉聞く郭公旅日記」、ｻｶｲ00083「弘化二年乙巳春中旅日記」、ｻｶｲ00084「仏生会卯の花衣旅日記」、ｻｶｲ00141「踊見旅日記」、ｻｶｲ00085「散る花の雪の旅日記」、ｻｶｲ00086「出向ふ雲の花の旅」、ｻｶｲ00087「旅日記法農桜」、ｻｶｲ00088「極楽花の旅日記」、ｻｶｲ00254「さくら卯の花旅日記」により作成

宝物開帳（A・C・D）、念仏踊の会式（E）、神代神楽の見物（G）、弘法大師忌日の法会である正御影供・百味講（F・I）、天満宮九百五十年忌（J）等、何らかの宗教的な行事となることが多い。

目的地は讃岐にある善通寺（A・F・H・I）、金毘羅（A・C）、伊予仙龍寺（H）、讃岐仏生山法然寺（D）・讃岐滝宮天満宮（E・J）、伊予石鎚山（B）、出雲杵築大社（G）、そして阿波・淡路の霊場（K）となっている。居住地半田村からおよそ三～五日の日数で行ける讃岐や伊予を中心とした神社仏閣であることが多い。最も遠方に赴いたのは、出雲杵築大社を目的地とした旅（G）であるが、これには二三日間の時間をかけている。

次に、旅の同行者について触れておきたい。妻と姉（A）、という場合もあるが、だいたいは半田村に居住する弥蔵と取引のある商人と見られる者の名前が書かれている。一番多いのは、二二人が同行した出雲杵築大社参詣の旅（G『出向ふ雲の花の旅』に記録）である。俳号を持っている人物（四人）と、石門心学活動を弥蔵と共に行っていた人物（二人）、大福帳等酒井家の経営帳簿に名前のある人物（一七人）で構成されている。百味講という弘法大師の信心に基づく宗教行事に参加するための旅（F『散る花の雪の旅日記』）には、半田村から一一人が同行している。同行者が一人である旅では、大坂屋嘉吉（H）、井川鶴作（I）春田宗三郎（J）、大道芳助（K）という名前が見える。讃岐善通寺と伊予仙龍寺を目的地にした旅（H『旅日記法農桜』に記録）に同行する大坂屋嘉吉は、弥蔵と取引のある商人でありかつ石門心学の活動を共に行っていた人物でもあり、Fの旅の同行者（百味講員）としても名前を連ねている。善通寺を目的地にした旅（I『極楽花の旅日記』に記録）に同行した井川鶴作は、半田村に隣接する半田口山村の人物である。同じ年の正月讃岐国の象頭山参詣の時に知り合い帰り道も一緒であったため、「薄々此度の事を契りあり」であったという。実際にIの旅で「同道」できたことは、「誠に神仏の引合せと喜ひ」と述べている。同行者なく弥蔵一人で赴いた旅もあった（D・E）。

（3）「旅日記」の特徴

それでは以上をふまえて「旅日記」の特徴を検討して

みよう。

まず一点目に指摘したいのは、費用についての詳細な記述が書き載せられていることである。弥蔵は、費用のかかった旅先での地名や費目が分かるように、その時々に子細に書き込んでいるのである。

例えば、H『旅日記法農桜』の三月十八日の箇所には次のようにある。

……其村続き左に記す、毛田・中の庄・西の庄・賀茂・東井の川、爰に辻町と言ふて町家あり、昼支度

一、弐分四厘　井関　東屋伊左衛門

次に西井ノ川・池田町過て坂野と言ふ所にて

一、壱分四厘　草鞋一足買

それより白地村へ芳野川を渡る、今朝より雨降りて少し水かさ増り舟賃高値なり、尤舟子八二人

一、四分　渡銭

馬路村、此辺谷川数度の渡りにて、迷惑なからも暮方に漸佐野村に着て、此所にて泊るなり

一、弐匁　柏屋文平宿料（後略）

（『旅日記法農桜』）

『旅日記法農桜』は、芳野川（吉野川）を渡る際の「舟賃高値」となった理由が記されていたり、どこで、何に費用がかかったのかが、詳細に分かる記述となっている。他の「旅日記」も同様の記述がなされ、旅における費目には、食事・宿料・草鞋・渡船のほか、参銭（賽銭）・寺社縁起・開帳料・「大師様尊前御蝋燭料」（H）等の参詣・信仰に関するものや、「檀の浦画図代」（I）、書物（「俳書花降道と云本買」（G）等）、「土産飴代」（H）、髪結賃等がある。

先述したように、弥蔵は、「旅日記」とは別に、旅における金銭出納だけを記録した帳面をつけている。その帳面である嘉永三年の「覚帳」には、三月十八日の記述として、次のようにある。

三月十八日与州三角寺の奥院（金光山仙龍寺のこと）、讃州善通寺金毘羅其余西讃東予霊場参詣諸造用覚

一、弐分四厘　辻井関支度　東屋伊左衛門

一、壱分四厘　草鞋一足

一、四分　白地渡銭

一、弐匁　佐野村泊り　柏屋文平

（「覚帳」）[30]

これは、H『旅日記法農桜』（嘉永三年三月十八日から

二二日）に記録した旅と同じ旅（における金銭出納）のことを記している。これを見ると、三月十八日は、伊予仙龍寺に向けての移動のための費用（支度＝食事代や、草鞋代、川を渡る船代である渡銭、佐野村に泊まった宿料）がかかったことが分かる。

ここで気づくのは、「覚帳」に記された内容と、『旅日記法農桜』に記された月日・費用・費目は、齟齬なく一致していることである。『旅日記法農桜』は、旅から帰った二日後である嘉永三年「三月念四日」に「書之」とある。おそらくは、「覚帳」を先に記し（旅に携行して記した可能性も高い）、「覚帳」の記載をもとに『旅日記法農桜』における費用・費目の記述がなされたと考えられる。当時の道中日記の多くには、費用の記載があることが指摘されているが、旅における費用を詳細に記した弥蔵の「旅日記」も、当時の道中日記と同じような性格を持っていると考えることができる。

二点目に指摘したいことは、日付、地名、次の目的地までの距離が日次に記されていることである。例えば、「廿二日、淀より乙立村へ壱里（G）、「玉（棚）野村に泊る、廿八日、是より鶴林寺迄十八丁上り坂」（K）のように、今いる場所の地名と、次の目的地までの距離を記している。一点目に指摘した費用と同様、日付・地名・距離は、当時の道中日記の記載項目としてよく見られる基本要素として挙げられているものである[31]。これらのことから、弥蔵の「旅日記」は、近世の道中日記としてこれまでの研究で取り上げられてきたものと同じ性格を持つものであると言えよう。

三点目は、川・難所の有無や、神社仏閣・名所旧跡の所在についての記述であるが、これも当時の道中日記に記載される項目としてはよく見られるものと指摘されている。例えば「川あり」「坂あり」、「けハ敷岩山あり」（B）、「一里半の山道なん（難）所なり」（K）のような、道中の移動に際しての必要な情報が記される。また、歌碑・芭蕉塚、旧跡、通りがけに参詣した寺社等が有る場所の名前や、そこに伝わる歴史の内容（例えば「一夜庵興正寺ハ足利尊氏公建立の寺也」（H）等）にも関心を示している。時には「里人」に次の目的地までの距離や土地の名を聞き、知り得たことも記す（B・D・I）。

四点目として、見聞したことに対して感想を記していることが挙げられる。例えば「此所よき町家なり」「広島

城見物見事也」（G）や、旅先で知り合った今治城下の「面白き男」との「種々の咄の中に狂歌の名歌有」ったこと（H）等である。感想を書き留めるようなものは、当時の道中日記の中では珍しいという指摘が注意されよう。[32]

五点目は、「旅日記」の最初に、序文が付けられ、旅の目的地や旅に込める願いが記されていることである。例えば、西日本最高峰の霊山として知られる伊予石鎚山に赴いた記録（B『見る青葉聞く郭公旅日記』）には、冒頭に次のようにある。

我、此たひ伊予国石鎚山へ参詣に趣しハ、富貴満福を祈るにもあらす、又祈らぬにもあらす、此身、息災堅固なる冥加をおもひ、登山に極りぬ

（『見る青葉聞く郭公旅日記』）

このような記述は、特にD『仏生会卯の花衣旅日記』からK『さくら卯の花旅日記』に顕著に見られる。「……宝物諸仏の開帳があると聞き、予、参詣に思いたつ」（D）、「（百味講に参加することは）現当二世安楽疑ひなきと言事を人々に進る者也」（F）、「即身成仏の悟りを聞き極楽浄土に入る」（H）、「迷（冥）土の旅の稽古」（K）であると述べている。こうした序文の挿入は、道中日記には見られない場合が多い。つまり弥蔵の「旅日記」は、近世によく見られる道中日記とは異なり、紀行文にも通じる要素を持っているのである。

六点目は、五点目とも関わるが、随所で詠んだ俳諧（時には狂歌も）を交えられている点で、これも紀行文に通じる側面と言えよう。例えば

今朝より雨晴渡り、笠・合羽抔を取置、心よく宿を出立

行春や見失ふたる雨の脚（H『旅日記法農桜』）

のように、天候や眺望を見て感じたこと等を詠み、「旅日記」の折々に交えて記しているのである。

なお、旅中に光明真言を読誦した回数も「旅日記」の最後に記している（ただしB・D・F・Iのみ）。D『仏生会卯の花衣旅日記』を例に挙げると、旅の最中に読誦した回数を、「旅中光明真言日課覚」として、「九日　四千辺　十日　三千五百辺……」と、日毎に読んだ回数と合計回数「壱万弐千辺」を記している。

以上のように、弥蔵の「旅日記」は、日付・費用・地名等が記されるような道中日記と同じような性格と、序文が付けられ、折々に詠んだ俳諧が記されるような紀行

文にも通じる性格を兼ね備えたものであると言えよう。[33]

では、これらの「旅日記」の中で、遍路日記はどのような特徴が見られるのだろうか。

第二節　『さくら卯の花旅日記』の基礎的研究

（1）「旅日記」と遍路日記の異同

本節では弥蔵の遍路日記について検討したい。取り上げるのは、これまでに遍路日記として紹介されてきたK『さくら卯の花旅日記』（安政五年（弥蔵五一歳）、以下、『さくら』）である。『さくら』の内表紙には、札の写しと思われる次のような記述がある。

天下太平　国家安全　安政五戌（ママ）午歳
奉納四国八十八ヶ所之内阿波国廿三ヶ所遍路同行二人
奉順礼淡路（三拾三所 四十九薬師）為二世安楽也（阿州美馬郡半田村 願主堺屋弥蔵）
日月清明　五穀成就　（季春 孟夏）大吉日

この旅で弥蔵は、阿波国の霊場十一～二三番を巡拝し、淡路国の三十三ヶ所、四十九薬師を巡り、その後阿波国に戻り、霊場一～十番を巡るという行程を辿っている。

引用史料を見ると、弥蔵は、四国八十八ヶ所の札所の内、阿波国の二十三ヶ所（阿波国にある札所全て）を「同行二人」（弘法大師と共に遍路（巡礼）を行うこと）で遍路を行う、ということを意識していることが窺える。これまで『さくら』が遍路日記と呼ばれてきたのはこうした点を踏まえてのことであると考えられる。

では、弥蔵が記した遍路日記は、どのような特徴を持っているのだろうか。第一節で検討した各項目を踏まえ、検討してみたい。まず、他の「旅日記」と同様に、序文と、随所で詠んだ俳諧・狂歌が記されている。[34]『さくら』には、他の「旅日記」と同じように紀行文に通じる要素が主要な記載項目の一つとなっているのである。一方で、序文に記された内容を見てみると、「阿淡両国の霊場を巡る」ことが目的であり、阿波国の霊場を巡ることは「高祖大師（弘法大師）の御修行の御跡を慕ひ」、淡路国の霊場を巡ることは「観音薬師の浄土を拝見」するためだということが強調されている。弥蔵の遍路日記は、他の「旅日記」と同じ様式で書かれているものの、それは「高祖大師の御修行の御跡」を巡拝するということを強く意識して書かれていると言えよう。この点に関して、この旅

より以前の天保一四年（弥蔵三六歳）には、以下の様に述べていた[35]。

右京雅君は此たび遍照尊の御跡を慕ひて、四国霊場を巡りしと聞、予も是を久しく望むといへ共、未ダ火宅の離れかたくして、けふや君の門出を見送かく

霜まれに行杖笠ぞ羨し　春耕（酒井弥蔵の俳号）

右京（半田村鼡友＝大久保岩吉の母）から「遍照尊（弘法大師）の御跡を慕ひて四国霊場を巡りしと聞」き、弥蔵も「久しく望」み、「羨し」と言っている。弘法大師の「御跡を慕」って四国霊場を巡ることは弥蔵の念願だったのである。天保一四年には「火宅の離れかたく」、つまり火宅（＝苦しみに満ちた俗世）から解放されることができずに行けなかった。これが安政五年の『さくら』では「日数二十一日、火宅の苦しミを逃れしも、迷途の旅の稽古にもならんかと思ふ」とあり、「火宅の苦しミ」から解放され、「迷（冥）土の旅の稽古」としての旅をする思いで出発したと述べている。さらに、『さくら』には続けて「扨、此道にも三途川、死出の山路あり、此辛抱ハ我等平生望む処にして、心のうちに満足せりとしか言う」とある。この旅には「辛抱」が必要であると認識しており、ある種の修行としての意味合いもあったと見ることもできる。このような弥蔵の霊場巡拝に対する念願が、『さくら』成立の前提となっていたと考えられるのである。

次に、日付、地名、次の目的地までの距離を見てみたい。これについては次のようにある。

是よりきりはた迄廿五丁、成当村日くれて宿を貸ふと云家ありて、此村にて泊る

十五日

秋月村・切幡村阿波郡也

四国第十番霊場、得度山切幡寺灌頂院、本尊千手観音、大門・中門其余建もの多し八伽藍

慾心を只一筋に切はたし

后の世迄の障りとそなる

此寺にて札打仕舞、是より古郷江趣く、

右の史料からは、次の目的地までの距離、地名、日付が記されていることが分かる。これについては、「廿六日、是より常楽寺迄十五丁、此間川有」、「是より大龍寺迄一里半、大井村川舟渡しなり、是登り坂」等のように、他の箇所でも同様である。道中の川・難所の有無等の記述が加えられることもある。これらは他の「旅日記」とも

同じ記載項目・形式であるといえよう。

一方で、史料の後半にある各霊場に到着したときの記述には、札所の番号や詠歌（「慾心を……」）が記されていることは注目される。先に述べたように弥蔵は十一～二十三番、一～十番霊場の順に巡っているが、その全てに「四国第十四番霊場、盛寿山常楽寺」や「四国第廿一番霊場、舎心山大龍寺」のように、霊場の番号を記して順に巡拝するということを強く意識しながら日付や地名（霊場名）についての記述を行っているのである。さらに弥蔵は、札所で詠歌を詠み（書き留め）、「此寺にて札打仕舞」のように、札所の参拝は札を打つという表記をしている。札を打つとは、もともと巡礼者は札を霊場内の堂宇の壁や柱に釘で打ち付けて納めたことから、巡礼で訪れる霊場を「札所」、札所へ詣でることを「打つ」「札打ち」と表現するようになったと言われている。札所での参拝行動に関する詠歌や札打ちの記述も、霊場巡拝を行うという意識を示すものと言えよう。

次に、旅中の費用や費目について書いている点も他の「旅日記」と同じである。[36] 食事、宿料・「米代木賃共」、賽銭、手引賃（案内料）、「大師様御影三十枚買」、「土産物」等、出費の内容も同様である。しかし、「米代木賃共」にあるように、煮炊きに必要な米や薪代を渡して安い料金で泊まったことを表わす表記が複数ある。この「米代木賃共」を支払って泊まった宿について、『さくら』には「巡行道法并泊り宿附覚」として、日付・歩いた道法とどこに泊まったのかが別途記されている。宿については「〇」と「一」の印を付けており、弥蔵によれば「〇印ハ宿料有宿屋也、一印ハ善根宿也」であるという。この「一印」がついている「善根宿」が、「米代木賃共」とある宿名と一致しているのである。つまり、弥蔵はこの旅で、善根宿を複数利用していることが分かる記述となっている。善根宿は、接待の一つとも言われるが、この点、『さくら』には、接待で受けた物品について「御接待頂戴覚」として例えば次のように記している。

三月廿四日

一、菓子一盆　小島村一里松鹿蔵殿

藤井寺二而

一、餅三ツ　麻植郡千田塚村講中

廿五日

焼山寺二而

一、餅三ツ　麻植郡別枝山講中

当時、遍路の旅の特徴の一つに接待があるという認識が人々にあったことが指摘されている[37]。日にちと、どこで、何を、誰から接待をしてもらったのかを記録している弥蔵にも、そのような認識があったと見ることができよう。

以上のように序文、俳諧・狂歌、日付、地名、次の目的地までの距離、道中の川・難所の有無や、費用等、『さくら』の記載項目については、他の「旅日記」と同様である。その一方で、『さくら』には他の「旅日記」には見られない特徴的な記述もある。霊場・詠歌・接待についての記述にも表れているように、この旅は弘法大師の「御修行の御跡」を「慕」（序文）って霊場（中心は札所）を巡拝するという意識を強く持って右の記載項目が記されていることが注目されよう。このような意識のもとで、霊場を巡拝した際に成立した諸記録・書物をひとまず遍路日記と呼ぶことができる。

（2）「旅日記」と遍路日記の意識面での共通性

ただし、こうした意識に関して注意すべきことは、札所以外の「神社仏閣名処旧跡」も「参詣」したと記し、由緒や所在についても記載していることである。ここで、この点についても少し触れておきたい。

五番地蔵寺から六番安楽寺に向かう途中の記述には次のようにある。

是より安楽寺へハ壱里なれ共、大山寺へ参詣仕候、壱里余り寄り、神宅村牛頭天王社あり、との宮明神より右へ入、廿丁程行て麓の茶屋荷物を預け置、山に登る、十八丁並松あり、仏王山大山寺本尊観世音、三重塔あり、二王門其外方丈・庫裏等建ものあり、奥院は三丁上にあるよし、黒岩大権現と承り候也、大門の外ニ源九郎義経公の馬の基（ママ）（墓ヵ）もあり

弥蔵は、六番霊場である安楽寺までは「壱里なれ共」と断って、大山寺へ参詣に行くと記している。そして、大山寺までの道中や境内の様子、奥院の情報を詳しく記している。大山寺は、源義経が屋島合戦の折り、奥の院

の黒岩山太郎坊をたずね勝利を祈願した場所と伝えられる等、源義経ゆかりの地とされる[38]。このように、札所とはなっていない寺へも参詣に行ったことが記されているのである。

一七番明照寺真福院（井戸寺）から一八番恩山寺の間では

日開谷村西つか村、此所の西手に
一、丈六寺と言ふ禅宗寺あり、当国太守様を始、家老中老一家中の石碑あり、山上に鎮守秋葉山大権現六社也、其外堂塔多し、中門、大門并松等あり、松林広し、前ニ勝浦川有

とあり、弘法大師信仰とはほとんど関わりのない藩主ゆかりの禅宗の寺（曹洞宗）も訪れ、由緒や境内の様子を記している。

その他、「府中村明神の社遙拝」「諏訪大明神遙拝」等、随所で明神「遙拝」をしている。これらのことは、弘法大師との関係の有無にかかわらず「神社仏閣」はもちろん、「名処旧跡」に関心を持ってそれらを訪れながら遍路を行っていたことを示している。

遍路日記には、霊場を順拝するという意識が強く表れていると指摘したが、それにとどまらない他の旅と共通する関心が見られるのである。遍路日記を取り上げる際は、このような点も見落とせないと考える。

第三節　道中案内記の影響と遍路日記の多様性

（1）『四国偏礼道指南増補大成』の影響

では、以上に見てきた『さくら』の記述内容は、どのような知を背景としているのだろうか。これを考える時に手がかりとなるのは、四国遍路の道中案内記の存在である。酒井家文書には、文化一二年版の『四国偏礼道指南増補大成』が現存している[39]。

『四国偏礼道指南増補大成』は、四国八十八ヶ所の札所への参拝方法、道中通過する村や川の情報等、道中案内に関する内容が掲載されたものである。真念『四国辺路道指南』（貞享四年初版）をさきがけとして「増補大成」と銘打って出版された。だが実際は「増補」ではなく簡略化したものであると指摘されている[40]。

貞享四年版の『四国辺路道指南』は、「初の本格的な四

国遍路案内記であり、当時のベストセラーとなったものである」[41]と言われ、遍路研究ではよく知られたものである。これの改変版である『四国偏礼道指南増補大成』は明和四年（一七六七）、文化四年、文化一一・一二年、天保七年と版を重ね[42]、各地の公共図書館や地方文書の中に現存している。『四国辺路道指南』も『四国偏礼道指南増補大成』も、当時需要が高かったことは多くの研究で指摘されているが、実際にどのような影響力があったのか、どのように利用されていたのかは明らかになっていない。

『さくら』は、『四国偏礼道指南増補大成』（以下、『増補大成』）に影響を受けて書かれているのだろうか。

まず、『増補大成』に述べられた遍路の参拝作法とでもいう内容に注目したい。

紙札打やうの事　其札所の本尊・大師・太神宮・鎮守・惣して日本大小の神祇・天子・将軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界平等利益と打べし、常に同行の恩得を感し、宿礼茶礼用心あるへし、男女ともに光明真言・大師の宝号にて回向し、其札所のうた三べんよむなり　（『増補大成』）

ここには、札を打つ（参拝する）際の、祈りの対象や方法について書かれている。傍線部は、光明真言や大師の宝号を唱え、詠歌（「札所のうた」）を詠むことを勧めた記述となっている。詠歌については先に触れたが、光明真言・大師の宝号についても、『さくら』の一丁裏に、「南無大師遍照金剛」（大師の宝号）と、光明真言「唵阿謨伽……」が書かれている。弥蔵は旅の中で、これらを唱えることを意識していたものと思われる。このように、『増補大成』に述べられた遍路の参拝作法と、『さくら』に見られる参拝行動に関する記述が類似している。

また、『さくら』には、四国遍路の旅とは「高祖大師御修行の御跡を慕」って「霊場」を巡ることであると記されていることは先に述べた通りである。この点に関して、『増補大成』が多く取り上げていることの一つに、大師が修行をしたと伝えられる場所の情報がある。例えば二一番大龍寺の記述に「此所大師少年の時、霊を感じ、求聞持を修し給へり」とあったり、八七番長尾寺から八八番大窪寺に向かう途中の「かく村」には「こゝに大師御修法の所あり」や、八八番奥院も「大師こゝにて求聞持修行あそバされしとなり」等があり、『さくら』に見られる弘法大師の「御修行の御跡を慕」って巡拝するという

意識とも通じていると見ることができる。

札所以外の「旧跡」に関する記述も『さくら』と『増補大成』で重なりが見られる。『さくら』では「神社仏閣名処旧跡」を「参詣」すると述べていた。実は『増補大成』でも「拝所其外村つゞき旧跡并由来諺等をかきのせたり」と、札所以外の「旧跡」を載せており、「旧跡」を訪れることを暗に促しているのである。では、どのような「旧跡」かといえば、弘法大師関係の記事が多い。例えば『増補大成』の一八番霊場恩山寺の記述には、「次ニつるまき坂下釈迦庵宝亀五甲寅年六月十五日弘法大師誕生尊像をあんちし」とある。この部分、『さくら』にも、「南の山つるまき坂と言、栁の釈迦庵宝亀五年寅六月十五日弘法大師誕生の尊像を安置す」とある。傍線部のように記述がほぼ一致している。

二十番鶴林寺奥院の情報についても以下の傍線部分に重なりが見える。『増補大成』を見ると次のようにある。

〇月頂山慈眼寺、右の瀧より八丁のぼる、是を鶴林の奥院と云、本尊不動又三丁余西に堂有、十一面不動大師御作也、此上方千尺のけハしき岩端に壱丈ばかりの卒都婆有、大師立玉ふと云、人間のわざによぶ所にあらず、又傍に岩屋あり、二十間ほど行、自然石の仏ぼさつ、色々のふしぎなる事あり、是よりよこせへもどり

（『増補大成』）

この部分、『さくら』には次のようにある。

一　月頂山慈眼寺、右の瀧ゟ五丁登る、本尊不動明王、弘法大師、又三丁余西に堂有、十一面観音、不動明王大師御作、此上に岩屋あり、寺より案内者出て灯を燈し見せる也（中略）是より岩屋へ這入也、奥行二十一間、始左りをさして入る、又左りをさして下りて行、右をさして入る、又左りをさしてそつて入る、此中広し、自然石の（ママ）の仏菩薩、護摩檀、幡、天蓋、戸帳石、法螺貝石等あり、是より戻り道胎内くゞり、其余数多不思義有、是より横瀬へ戻り

（『さくら』）

『さくら』の引用部分の三行目に見える「案内者」には「月頂山岩屋禅定手引賃」（『さくら』後方の「諸入目覚」に記述あり）を支払い、岩窟の案内を頼んでいることが窺える。案内を頼んだ部分は『増補大成』以上の情報を記しているが、岩屋までの移動、本尊や堂の様子、岩屋の中に対する「其余数多不思義有」という認識も、『さ

くら』・『増補大成』双方に一致している。この記述部分は、『増補大成』の知識を参考にしながら、案内者から得た情報を加えて『さくら』を書いたのではないかと考えられる。

さらに、札所となっていない神社についても、『さくら』・『増補大成』双方で載せている所がある。例えば『さくら』では一番霊山寺から二番極楽寺の道中、「是より七丁北に大麻彦神社　中宮　西宮」とあり、『増補大成』では「（霊山寺から）五里、三丁北に大麻彦大明神伴社、中宮西宮あり、かならす参詣すべし」（傍線部は記述の重なるところ、以下同様）と、記述が類似している。

実は、記述形式も非常によく似ている。まず、札所についての記述を見てみると、『さくら』では十一番藤井寺について、次のようにある。

四国第十一番霊場金剛山藤井寺、本尊薬師如来

詠歌

色も香も無比中道のふしい寺

真如の波のたゝぬ日もなし　（『さくら』）

同じ部分、『増補大成』を見ると、次のようになっている。

十一番藤井寺　金剛山と名づく、大師此寺を始め給ひ、薬師如来　御長三尺に作り本尊とし給ふ

【本尊図】色も香も無比中道のふじゐ寺

しんによの波のたゝぬ日もなし

（『増補大成』）

どちらも霊場の番号・寺院の山号・霊場名（山号と霊場名の順序には違いがあるが）、本尊に安置される仏、詠歌の順に記している点が類似している。

道中の移動に関する記述形式についても言える。十三番大日寺から十四番常楽寺までの道中を、『さくら』では「是より常楽寺迄十五丁、此間川有、名東郡延命村」と記す。この部分、『増補大成』を見ると、「是ゟ常楽寺迄十五町●此間川有●ゑんめい村」（●は「村々の隔」に記されている）とある。また、『さくら』では「是ゟ立江寺迄一里、天王村、瀧宮牛頭天王社遙拝、田の、中山、立江村石橋八ツ有、此橋上に白鷺居る時ハ通らずと言ふ」とあるが、この部分、『増補大成』では「是より立江寺迄一里●天王村●たの中山●たち江村●石はし八ツ有、此橋上に白鷺居るとき八通らずと云つたふ」とあり、「瀧宮牛頭天王社遙拝」（『さくら』）以外は、次の目的地までの

距離や、通過する村名、道中通過する土地の伝承を記している点が一致しているばかりでなく、記載順も全く同じなのである。このように『さくら』と『増補大成』では、霊場間の移動についての記述形式においても類似しているのである。

では、全体的にどれくらい記述に重なりが見られるのかを見てみたい。『さくら』と『増補大成』の記述を、札所ごとに次の札所までの移動に関する記述を含めて並べてみたのが【表2】である。記述に重なりがあるところには下線を引いた。これをみると、霊場と、霊場間の移動に関する記述、弘法大師の修行の跡についての記述内容、札所以外の神社仏閣や旧跡の内容に、類似している点が多数あることが分かる。そして、『さくら』・『増補大成』双方とも、霊場（札所）を順々に巡れるように、道中の移動距離や旧跡等の情報を記すという基本的スタンス自体が非常によく似ているのである。

以上のことから、弥蔵の『さくら』は、記述形式・内容とも『増補大成』に強く影響を受けて書かれていることが分かる。近世の道中日記は、刊行された道中案内記の内容や形式に強く規定されて著されるようになったことが指摘されている[43]。これを踏まえれば、『さくら』は、『増補大成』などの遍路の道中案内記の知を背景に著されたことをよく示すものと言えよう。

（2）遍路日記の多様性

このように見てくると、実は『さくら』以外にも、『増補大成』からの影響を受けたことが窺える「旅日記」があることが注目される。例えば『極楽花の旅日記』は、善通寺を目的地にした旅の記録であるが、四国八十八ヶ所のうちの一四ヶ所の札所を含んだ寺社参詣をしたことが記されている。この『極楽花の旅日記』は、『増補大成』の記述と、いくつか重なる箇所が確認できるのである。

『極楽花の旅日記』では、金倉寺（七六番霊場）の記述に「此所は智證大師御誕生の所にて御影堂に安置す、本堂は薬師如来也」（『極楽花の旅日記』）とある。この部分、『増補大成』を見ると、「此寺ハ智證大師誕生の地なり、智證大師ハ弘法大師の御おい（甥）なり、本尊薬師如来……」（『増補大成』）とあり、傍線部に重なりが見られる。同様に、天皇寺（七九番霊場）の記述「此宮は天

【表2】酒井弥蔵「さくら卯の花旅日記」と真念『四国偏礼道指南増補大成』の比較

弥蔵「さくら卯の花旅日記」	『四国偏礼道指南増補大成』
四国第十一番霊場金剛山藤井寺、本尊薬師如来 詠歌 　色も香も無比中道のふしい寺 真如の波のたゝぬ日もなし 壱里山へ登りて 長門庵弘法大師、此庵ニ而泊る、 廿五日半里行て柳の水大師堂、又半里行て峠に一本杉大師堂 是■廿余町下りて左右内村、川橋あり、是より焼山寺迄十八丁登り坂、坂中に薬師堂あり、名西郡左右内村	十一番藤井寺　金剛山と名づく、大師此寺を始め給ひ、薬師如来御長三尺に作り本尊とし給ふ 【本尊図】色も香も無比中道(むひちうだう)のふじゐ寺 　　しんによの波のたゝぬ日もなし 是ゟしやうさんじ迄三里山坂也、一里半ゆきて柳の水と云有、是ハ旅人渇せし時、大師楊枝を以て加持し給ひ、水ほとはしりいてあたへ給ひし所也、其楊枝をさしおき給へバ柳となり、其水往来の人渇をやすめ、利をうるもの也、今柳の水に大師堂有、宿かす也、しるし石有●これよりさうぢ村●谷川道こりとり川と云、人皆こりをとる、焼山寺へ十八町のぼる坂中に薬師堂あり
四国第十二番霊場、摩廬山焼山寺性寿院、本尊虚空蔵菩薩 　後の世を思へハ恭敬焼山寺 死出や三途の難所ありとも 奥院ハ十八丁登る、五、六丁行て三ツ峯権現社あり、其神を爰に遙拝、又五、六丁行て蛇の窟(イワヤ)あり、岩屋の口に牛頭天王社あり、素盞烏尊 岩屋のうへに大国神社あり、大己貴命なり 池の跡あり、大師御杖にて底を突抜き給ふ故に水なし、護摩の窟本尊不動明王求聞持の窟本尊虚虚空蔵菩薩、胎内くぐり岩屋を抜る、北の峯役行者是を下りて階子を上りて、中の峯蔵王大権現、南の峯杖立権現猿田彦命、 是より寺へ戻り、道下り坂、大門より十八丁坂を下りて、右衛門三郎墓庵あり、右衛門三郎ト大師下の木像あり、是より一の宮へ五里、左右内村、阿川村、広野村、入田村 一、建治の瀧本社蔵王権現其余仏菩薩あり、霊地也、名東郡一の宮村	十二番焼山寺　名西郡摩盧山性寿院と号ス、山高く聳たり、本尊虚空蔵大師御作、坐像四尺五寸、奥院ヘハ寺より十町余あり、護摩窟蛇窟なといふあり、大門より十八町坂をくたりて右衛門三郎墓あり、大杉大サ七かいありといふ 【本尊図】のちの世をおもへハ恭敬しやうさん寺 　　死出や三途のなんじよありとも 是より一の宮へ五里●さうち村へもとり一の宮へ行てよし●あかハ村●ひろの村●いりた村二本木の茶やと云有、しやうさんじゟ是迄山道谷間川あまた有
四国第十三番霊場大栗山大日寺花蔵院、本尊十一面観音 　阿波の国一の宮とハゆふたすき 懸て頼めや此世後の世 廿六日 是より常楽寺迄十五丁、此間川有、名東郡延命村	十三番一宮寺　名東郡、寺ハ大栗山花蔵院大日寺と云、大師大日如来の像を作り安置し給ふとなん、今の本尊ハ十一面観音一の宮の御本地と聞ゆ、此寺奥院と号する所有、是より十八町西にあり霊地なり 【本尊図】阿波の国一の宮とハゆふたすき 　　かけてたのめや此世のちの世 是ゟ常楽寺迄十五町●此間川有●ゑんめい村
四国第十四番霊場、盛寿山常楽寺、本尊弥勒菩薩 　常楽の岸にハいつか到らまし　ぐぜいの舟に乗りをくれずハ 是より国分寺迄八丁、矢野村、	十四番常楽寺　名東郡、盛寿山と云、本尊弥勒ぼさつ坐像八寸、大師の御作、俗此てらを矢野延命と云 【本尊図】常楽のきしにハいつかいたらまじ 　　ぐぜひの舟にのりおくれずバ 是ゟこくぶんじ迄八町●やの村
四国第十五番霊場、法養山国分寺金色院、本尊薬師如来 　薄く濃く分けく色を染ぬれハ　流転生死の秋のもミぢ葉 是より観音寺迄十八丁、観音寺村、	十五番国分寺　法養山金色院と云、国分寺といふハ聖武天皇詔して丈六の釈迦二ぼさつを作り、大般若を写し天下一国に一寺づゝこん立し給ふにより、国分寺と国々にて名付、今此寺薬師如来坐像長一尺五分作者しれず 【本尊図】うすく濃わけく色をそめぬれバ 　　流転生死のあきのもミぢ葉 是ゟくハんおんじ迄十八町●観音寺村
四国第十六番霊場、光耀山千手院観音寺、本尊千手観音 　忘れすも導引給へ観音寺 西方世界弥陀の浄土へ 是より井戸寺迄十八丁、府中村明神社遙拝、岩延村、井戸村、	十六番観音寺　名東郡、光耀山千手院と云、本尊千手観音御長六尺大師の御作 【本尊図】わすれずも導引玉へくハんおんじ 　　さいほう世界ミだのじやうどへ 是ゟ井土寺迄十八町●かうの村明神のやしろ有
四国第十七番霊場瑠璃山明照寺真福院、本尊薬師如来、鎮守八幡宮あり、 　俤を移して見れハ井戸の水 結べハ胸の垢や落なん 是より恩山寺迄五里、鮎喰川、蔵本村、佐古町五丁目、 諏訪大明神遙拝、新町、富田、二軒屋出離れ、つめた川橋あり、法花川橋あり、日開谷村、西つか村、此所の西手に 一、丈六寺と言ふ禅宗寺あり、当国太守様を始、家老中老一家中の石碑あり、山上に鎮守秋葉山大権現六社也、其外堂塔多し、中門、大門井松等あり、松林広し、前ニ勝浦川有　（貼紙は略） 前原村、志保村、田野村	十七番井土寺　名東郡、瑠璃山明照寺真福院と云、聖徳太子の建立といひ、又ハ行基とも云、大師あそび給ひ本尊薬師如来御長五尺両脇士ぼさつ、四天王作り安置し給へり、鎮守八幡楠明神あり 【本尊図】おもかげをうつして見れハ井土の水 　　むすべバむねのあかやおちけん 是ゟおんさんじ迄五里●あくひ川徳嶋までハ家つゞき、徳嶋●せミがはな●二けんや町此間につめた川はし有、ほつけ川はし有、壱丁ほど行、しるし石有●にしつか村●ゑた村●しぼ村●たの村しるし石有
四国第十八番霊場勝浦郡母養山恩山寺、本尊薬師如来、行基菩薩の御作、 　子をうめる其子母の恩山寺 とふらひかたき事ハあらじな 南の山つるまき坂と言、埜の釈迦庵宝暦五年寅六月十五日弘法大師誕生の尊像を安置す、 是■立江寺迄一里、天王村、瀧宮牛頭天王社遙拝、田の、中山、立江村石橋八ツ有、此橋上に白鷺居る時ハ通らずと言ふ、爰に歌有、 　御関所五ツの罪ハ立江寺 頼めハ免し通し給へや	十八番恩山寺　勝浦郡、此寺聖武天皇の勅に仍て行基ぼさつ造立し給ひ、本尊薬師の坐像行基ミつから作り給ふ、其後大師いたり給ひて再興し、御母の骨をおさめ、御はかを築それゟ母養山恩山寺と号すとなん、次ニつるまき坂下釈迦庵宝亀五甲寅年六月十五日弘法大師誕生尊像をあんちし次に藪の下むつきを納し所也 【本尊図】子をうめる其父母のおんさんじ 　　とふらひかたき事ハあらじな 是より立江寺迄一里●天王村●たの中山●たち江村●石はし八ツ有、此橋上に白鷺居るときハ通らずと云つたふ

四国第十九番霊場、橋池山立江寺地蔵院、本尊地蔵菩薩 　いつかさて西の住居の我か立江　愚生の船に乗て到らん 廿七日、是より鶴林寺迄三里、立江村、櫛渕村、泥（ママ　沼カ）江村、森村より鶴林寺へ十八丁、坂なり、右森村より勝浦川を北へ渡りて星谷村より十二丁登りて星の岩屋あり、三間四方あり、中に小社三ツあり、石仏有、前に岩有、階子にて登る、上の宮ハ北斗星を祭る、此岩屋の上より軒を落る数丈の瀧あり、大師堂観音堂あり、横瀬村、鶴林寺奥院へ行ハ、此所まで打戻り、道六十五丁と川内村、坂本村、黄檗村、大久保村少し行て、灌頂が瀧、毎朝五ツ時より四ツ時まで日輪に向て、不動明王の御来迎あり、 一、月頂山慈眼寺、右の瀧■五丁登る、本尊不動明王、弘法大師、又三丁余西に堂有、十一面観音、不動明王大師御作、此上に岩屋あり、寺より案内者出て灯を燈し見せる也、先岩屋の口に十六の階子有、小社ハ熊野大権現、鞍石鳴る右之方へ少し行、小社あり、二タ葉権現、此神ハ大師此窟を開き給ふ時御案内し給ふ時、御案内し給ふ神也、是より岩屋へ這入也、奥行二十一間、始左りをさして入る、又左りをさして下りて行、右をさして入る、又左りをさしてそつて入る、此中広し、自然石のの（ママ）仏菩薩、護摩檀、幡、天蓋、戸帳石、法螺貝石等あり、是より戻り道胎内くゞり、其余数多不思義有、是より横瀬へ戻り、勝浦川を南へ渡りて玉（ママ　棚カ）野村に泊る、 廿八日、是より鶴林寺迄十八丁登り坂、勝浦郡鶴敷地村（貼紙は略）	十九番立江寺　橋池（きやうち）山地蔵院と云、此寺聖武天皇御願といへり、本尊地蔵ぼさつ小像なりしを大師爰にわたらせ給ひて六尺の像を作り、かの小像をおさめ給ふとなり 【本尊図】いつかさて西のすまひのわがたちえ 　　ぐぜひのふねにのりていたらん 是ゟくわくりんじ迄三里●たてえ村●くしふち村しるし石有、左の方三十町程わきにいはわき村取星（しゆせい）寺といふあり、此寺大師加持し給ふと云星石あり、是より又三十町ほど過ぎて星谷（ほしたに）といふあり、星の岩屋三間四方もありなん半（なかば）に数丈の瀧あり、名区なり、此星谷より行て坂本といふ村有、此所に大師宿し給ふ時、霜いたくふり人寒気になやめり、大師きこしめし加持し給ひしより此里霜ふらず、となり村ハ殊に霜ふかし、星谷より半里川はたを行、●よこせ村●星谷へよらずくわくりんじへすぐに行時ハ●もり村、是ゟくわくりんじへ十八町坂也●奥院へかくる時ハもり村ゟ二里半、此間かつら川有●与川内村●坂本村●きハた村●大くぼ村すこし行て灌頂が瀧不動明王つねに現じ給へり ○月頂山慈眼寺、右の瀧より八丁のぼる、是を鶴林の奥院と云、本尊不動又三丁余西に堂有、十一面不動大師御作也、此上方千尺のけハしき岩端に壱丈ばかりの卒都婆有、大師立玉ふと云、人間のわざにおよぶ所にあらず、又傍に岩屋あり、二十間ほど行、自然石の仏ぼさつ、色々のふしぎなる事あり、是よりよこせへもどり●たなこ村
四国第二十番霊場、霊鷲山鶴林寺宝珠院、本尊地蔵菩薩、三重塔あり、其外建もの多し、 　茂りつる鶴の林をしるへにて　大師そいます地蔵帝釈 是より大龍寺迄一里半、大井村長川舟渡しなり、是登り坂、那賀郡加茂村	廿番鶴林寺　霊鷲山宝珠院と云、此寺のはしめ大古なり、大師いたり給ふ時樹上に鶴有、翅（つばさ）の下より光明現ぜしを、大師御覧じけれハ、地蔵の金像也、其とまりし木を切、御長三尺の地蔵を作り、かの金像を納め、伽藍を立給ふ 【本尊図】しけりつる鶴のはやしをしるへにて 　　大師そいます地蔵帝釈 是ゟ大龍寺迄一里半●加茂村へ行時ハ二里也●大井村なか川舟わたし●わかすき村家四五軒ゟ
四国第廿一番霊場、舎心山大龍寺常住院、本尊虚空蔵菩薩、三重塔あり、其余建物多し、 　大龍の常に住むぞやげに岩屋　しやしん開持ハ守護のためなり 四　五丁南に大師求聞持をハ修し給ひし岩窟あり、堂の前に橋あり、三十丁程ハ深山也、龍の岩屋奥行五十五間有、中に龍の姿石、せり割石、見返り石、其奥に大師を安置す、其外袈裟懸石、法螺貝石等あり、 是より平等寺迄二里、阿瀬比村、おゝね坂上り下り、大根谷、大師堂本尊地蔵菩薩、那賀郡荒田野村	廿一番大龍寺　那賀郡、舎心山常住院と云、本尊虚空蔵大師御作也、此所大師少年の時、霊を感じ、求聞持を修し給へり、霊験大師ミづから三教指帰等にのべ給ふ名区なり 【本尊図】大龍のつねにすむぞやけに岩屋 　　しやしん聞持ハしゆごのためなり 是ゟ平等寺迄二里、卅町程深山、本道ハ山口村にかゝる三里也、●あせび村●おゝね坂●あらたの村
四国第廿弐番霊場、白水山平等寺醫王院、本尊薬師如来、大師御作 　平等にへだての無きと聞時ハ 　あらたのもしき仏とぞ見る 是より薬王寺迄五里、寺のまへに川橋あり、廿町程ハ家続、月夜村大師堂あり、此処に大師御加持水の泉あり、参詣、月夜坂上り下りて川有橋有、鉦打茶屋あり、鉦を打し石あり、逆瀬川橋あり、小野村爰にて泊る 廿九日　松坂、此所古道新道の別れしるし石有、左りへ古道へ行、たい村、笘越坂、由岐浦、おほ坂、木々浦、日和佐、たい村、をた坂下りて川有、北河内村、日和佐浦御陣屋あり、町家也、海部郡也	廿二番平等寺　白水山医王院と号す、此寺大師開き給ひ、薬師御長二尺坐像作り安置し玉ふ 【本尊図】平等にへだてのなきときく時ハ 　　あらたのもしきほとけとぞ見る 是ゟ薬王寺迄七里、寺のまへ川わたり廿町ほどは村つゞき●月夜村●かねうち坂ふもとに茶屋あり●さかせ川此川の蟾貝人の足にたちていためるより大師加持し給ひわたる所ばかり、貝のとがりなし●小野村此間松坂しるし石あり●たい村●とまこえ坂●おほ坂（ぜんにん有）●ひわさたい村をた坂くたり川あり、北かわち村●ひわさ村浦川あり
四国第廿三番霊場、医王山薬王寺無量寿院、本尊薬師如来、大師御作、 　ミな人の病ミぬるとしの薬王寺　瑠璃の薬をあたへましませ 是より新道を戻る、四十丁程遠しと言へ共坂無し、北河内村、大藤村、是より松坂へ行合、鉦打迄戻り道、此所より右へ上福井村、下福井村、湊と言所にて泊る、日和佐より津の峯権現へ参詣、同行あり女三人 四月朔日、橘浦、答嶋、是より津の峯へ十八丁上り坂、鳥居有、 一、本社津峯大権現　別当真言宗本尊薬師如来　式内賀志姫命 是より富岡へ五十丁下り坂、富岡町家也、川あり船渡し、三栗村、大京原村川あり、船渡シ、赤石浦、金磯新田、小松島浦、町家なり、中田村、輪田浦、是より法花へ戻り、徳島へタ暮に来りて佐古町五丁目にて泊る 二日御郡代御役所にて切手頂戴仕、是より淡州へ越く、徳島助任より大岡へ出て、鈴江川船渡し、広島浦、新喜来村船渡し、徳長村、木津村、撫養四軒家町、林崎浦船渡し、岡崎村、此所にて泊る、今日参詣の神社左之通 一、勢見金毘羅大権現 一、宮島金毘羅大権現 一、木津金毘羅大権現	廿三番薬王寺　海部郡医王山無量寿院といふ、行基ぼさつ開基なり、後に大師あそへ給ひ、薬師如来の像を作り安置し給へり、塔の本尊千手観音脇士二十八部ミな行基の御作、是ゟ西六十余町をへだて奥院あり、あやしき岩やに大師御作の本尊ましませり、奇瑞の事有 【本尊図】ミな人のやミぬるとしのやくわうし 　　るりのくすりをあたへましませ 右阿波分是ゟ土佐ひがし寺迄廿一里内十里阿波分●かた村●よこかう坂●山川内村こゝうちこし寺真言道場遍礼いたハりにて国主ゟこんりう有、少ゆき●かんぼう坂山越●たちはな●こまつ●ほとり●かうち●むぎ浦●ひわさゟ是迄山谷川多し
是より板東村へ三里 四国第壱番霊場、竺和山霊山寺一乗院、本尊釈迦如来 　霊山の釈迦の御前に巡り来て　万の罪も消失にけり 是より七丁北に大麻彦神社　中宮　西宮 板野郡極楽迄十丁、檜村	一番霊山寺　阿州板野郡竺和山一乗院と号す、此寺弘法大師・釈迦・大日弥陀の三尊を作り、三堂別にたて給ひ、就中釈迦を本尊とし、天竺の霊山を和国に移せしにより竺和山霊山寺といふ、鳴戸見物の人ハ爰にてたづねらるべし、五里、三丁北に大麻彦大明神伴社、中宮西宮あり、かならず参詣すべし 【本尊図】（座長二尺）霊山の釈迦のみまへにめぐりきて 　　よろづのつミもきへうせにけり 是よりごくらくじ迄十町、板野郡檜（ひのき）村

四国第弐番霊場日照山ト云、本尊阿弥陀如来 　極楽の弥陀の浄土へ行たくハ 南無阿弥陀仏口くせにせよ 是より金泉寺迄廿五丁、川端村・大寺村	二番極楽寺　日照山といふ、此寺行基ぼさつのはじめ給ふといへり、本尊阿弥陀坐像、御長四尺五寸、行基の御作なり、左に薬師如来右に弘法大師の御影あり 【本尊図】極らくの弥陀の浄土へゆきたくバ 　　南無あミだふつくちくせにせよ 是ゟ金泉寺迄廿五町●河はた村●同郡大寺村●
四国第三番霊場亀光山金泉寺釈迦院、本尊釈迦如来 　極楽の宝の池を思へたゝ黄金の泉澄ミたゝへたる 是より黒谷迄一里、岡の宮大師堂あり、吹田村・犬伏村・那東村・黒谷村此所に橋有、歌に 　御仏に結ふえにしの法りの橋往かふ人の罪ハ消へつゝ	三番金泉寺　亀光山釈迦院といふ、此寺大師ひらき玉ひ、釈迦如来御長三尺大師御作、亀山法皇の御廟あり 【本尊図】極楽のたからのいけをおもへたゞ 　　こがねのいづミすミたゝへたる 是よりくろだに迄一里、おかの宮大師堂あり●ふき田村●いぬふし村●なとう村より十八町谷へ入ゆく、板野郡●黒谷村
四国第四番霊場、黒岩山大日寺遍照院、本尊大日如来 　眺むれハ月白妙の夜半なれや唯黒谷に黒染の袖 是より地蔵寺迄十八丁、矢武村	四番大日寺　黒岩山(こくがんさん)遍照院といひ、又ハ黒谷(くろたに)寺とも云、本尊大日坐像御長一尺五寸、大師御作なり 【本尊図】ながむれバ月しろたへの夜半なれや 　　たゞくろたににすミそめの袖 是ゟぢぞうじ迄十八町●同郡矢武(やたけ)村
四国第五番霊場、無盡山地蔵寺荘厳院、本尊地蔵大菩薩、此寺大伽藍にして五百羅漢有 　六道の能化の地蔵大菩薩ミちひき給へ此世後の世 是より安楽寺へハ壱里なれ共、大山寺へ参詣仕候、壱里余り寄り、神宅村牛頭天王社あり、との宮明神より右へ入、廿丁程行て麓の茶屋荷物を預け置、山に登る、十八丁並松あり、仏王山大山寺本尊勧世音、三重塔あり、二王門其外方丈・庫裏等建ものあり、奥院は三丁上にあるよし、黒岩大権現と承り候也、大門の外ニ源九郎義経公の馬の基（ママ　墓カ）もあり 御詠歌 　さしもくさ頼む誓ひも大山の松にも法りの花や咲らん 是より梺へ下り、七条村へ出て曳野村へ行	五番地蔵寺　無尽山荘厳院といふ、熊野権現御夢想の妙薬有、寺にて受らるべし、此寺ハ大師此所にて熊野権現出たまひ、霊木を大師へまひらせられ、大師其木にて地蔵ぼさつ一寸八分の尊像を刻給ふ、国民(くにたみ)霊異を慎ミ、伽藍を立といへり、其後後宇多の院の御時住持霊感の事ありて、御尺一尺七寸の地蔵を作らしめ、彼一寸八分の古像を新像のむねにおさめ、又阿弥陀薬師の二像を作り、両脇に置、熊野権現天照太神のやしろ有 阿州地蔵寺　奥院　五百羅漢集所、本順ぎやくうちぬけ 【本尊図】六道の能化(のうけ)の地蔵大ぼさつ 　　ミちびきたまへこの世のちの世 是ゟあんらくじ迄一里●かんやけ村●七条村●ひきの村
四国第六番霊場、温泉山安楽寺瑞雲院、本尊薬師如来 　借りの世に知行争ふ無役也　安楽国のしゅこを望よ 是より十楽寺迄十丁、此間ニ熊野庄権現社あり、萬尾村	六番安楽寺又ハ瑞運寺とも云、板野郡なり、大師薬師如来の坐像御長一尺三寸に作り、伽藍を立、安置し給ふと也、大師のころ迄此所に温泉あり、薬師を本尊となされ温泉山と云よし 【本尊図】かりの世に知行争ふむやくなり 　　あんらく国のしゅこをのそめよ 是より十らくじ迄十町●同郡たかを村
四国第七番霊場十楽寺、本尊阿弥陀如来 　人間の八苦を早く放れなば到らんかたハ九品十らく 是より熊谷迄一里、吉田村・藤原村・土成村此所阿波郡也	七番十楽寺　本尊坐像の阿弥陀如来極楽の十らくをとりて寺の名とせり 【本尊図】人間の八苦をはやくはなれなば 　　いたらんかたハ九ほん十らく 是よりくまたに迄一里、此間のはら也、今ハ吉岡といふ●あわ郡となり村
四国国（ママ）第八番霊場、普明山熊谷寺真光院、本尊千手観音、三重塔・大門・中門あり 　薪取水くま谷の寺に来て　難行するも后の世のため 是より法輪寺迄十八丁、此所、田野にはさめり故ニ田中ト云	八番熊谷寺　普明山真光院と云、谷深く水涼し、本尊千手千眼観音、作者不知、立像御長六尺 仏舎利百廿六粒御くしに納るよし、御足のうらに記文有、脇立不動毘沙門運慶作、御筆の額をかけたり 【本尊図】薪(たきぎ)とり水くま谷の寺にきて 　　なんぎやうするものちの世のため 是よりほうりんじ迄十八町
四国第九番霊場白蛇山法輪寺、本尊釈迦如来 　大乗の秘方も科もひろがへし　転法輪の円とこそきけ 是よりきりはた迄廿五丁、成当村日くれて宿を貸ふと云、家ありて、此村にて泊る 十五日 秋月村・切幡村阿波郡也	九番法輪寺　白蛇山といふ、此地田野(でんや)にはさめり、本尊坐像の釈迦如来、御長一尺八寸 【本尊図】大乗のひはうもとかもひろがへし 　　転法輪の名んとこそきけ 是ゟきりはた迄廿五町●あきつき村●きりはた村
四国第十番霊場、得度山切幡寺灌頂院、本尊千手観音、大門・中門其余建もの多しハ伽藍 　慾心を只一筋に切はたし　后の世迄の障りとそなる 此寺にて札打仕舞	十番切幡寺　得度山灌頂院と云、寺の名を以て村の名とせり、本尊千手観音不動毘沙門を両におけり、皆大師の御作、中門多門持国大門の二王ミな運慶の作なり 【本尊図】よくしんをたゝ一すちに切はたじ 　　のちの世までの障とそなる 此所にて藤井寺焼山寺とゆき戻りて、田中法輪寺へ行といふ事を教る人多し、益なし、吉野川と云大河を二度わたり、道のそん二里斗有、大窪寺より来る人ハ、一番之霊山寺迄此書を逆に見るべし、霊山寺ゟ是まで十里十ケ所と云、是ゟ藤井寺迄一里半●大野しま村●大八嶋村●此間吉の川と云舟わたし有●それより麻植村にいたる

ｻｶｲ00254「さくら卯の花旅日記」と真念『四国偏礼道指南増補大成』（ｻｶｲ03241「四国偏礼道指南増補大成」を使用）により作成

皇崩御被遊し時に金棺しハらく爰に置奉りし所也、今の宮有所也」（『極楽花の旅日記』）という部分、『増補大成』には「七十九番崇徳天皇、……崇徳天皇崩御あそばされし時金棺しバらくこゝにおき奉しより爰にも御廟を立といへり」とあり、傍線部は内容と表現が一致している。白峰寺（八一番霊場）での「崇徳天皇宮結構也」（『極楽花の旅日記』）という記述は、「崇徳天皇を此山にほうむり奉つる御廟けっこうなり」（『増補大成』）と、感想も一致している。

札所以外についてはどうであろうか。特に弘法大師とは関係のない旧跡についてはどうか。『極楽花の旅日記』には源平合戦にまつわる旧跡の記事が多い。例えば八四番屋島寺から八五番八栗寺に向かう道中では、

遠くハ艮に小豆島見ゆる、又東の出口に血の池あり、昔時源氏の士血刀を洗ひし池と言水赤し、東の坂を下りて檀の浦に佐藤（ママ）次信碑名あり、此処にて休足……此辺名所一見を同道と申て是より見巡る也、○内裡跡安徳帝の御所跡・菊王丸の墓・黄牛か崎、夫より見返り橋を渡りて武（ママ）倒（例カ）村掛りて洲崎寺・祈り石・駒蹄石・惣門・佐藤次信墳・太夫黒馬の墓　是は次信追善の為に義経より法師の元へ送りし馬の墓也　世に太夫黒と言　源氏の木戸　今は田の中　瓜生山　源氏陣屋の跡なり　六万寺　悉く見物相済……

（『極楽花の旅日記』）

とある。弥蔵が源平合戦にまつわる「名所」を多く見物しているこの部分、『増補大成』を見ると、「東坂十町くだりて佐藤次信墓あり、洲崎の堂観音大師御作、瓜生山とて源氏の本陣所あり」とある。『増補大成』にも源平合戦に関係した名所旧跡記事があり、部分的に記述が重なっているのである。

では、この旅はどのような目的があったのか、『極楽花の旅日記』に記された序文を見てみたい。それによれば、「今年も正御影供に当たりて、五岳山善通寺弘法大師の尊前に参詣と定り」、「発足」したと述べている。『極楽花の旅日記』には『さくら』に見られるような霊場巡拝を目的にするとは記していないが、弘法大師の忌日の法会である正御影供に際し、大師の「尊前に参詣」するという意識を持って善通寺に向けて出立している。

参詣した寺社を見ると、善通寺に参詣した後、「東讃岐神社仏閣参詣に趣」くと記し、「氏神八幡宮の末社石神大

明神」→**鶏足山金倉寺**→**桑多山道隆寺**→**鵜足津道場寺**→**崇徳天皇社**→**白牛山国分寺**→**松山白峯寺**→**青峯山根香寺**→**一宮田村大明神**→仏生山法然寺→石清尾八幡宮→高松大天神→高松之御坊→**南面山屋嶋寺**→**五剣山八栗寺**→**補陀洛山志度寺**→日内山霊芝寺→**補陀山長尾寺**→白鳥大神宮→**医王山大窪寺**という順で寺社参詣をしている。太字は八十八ヶ所に含まれる札所を示している。札所のみに注目すれば、この旅では七五～八八番を巡っている。

このように、『極楽花の旅日記』は、序文に弘法大師への信心を意識した記述があり、四国八十八ヶ所に含まれる複数の札所を参詣したことが記され、さらに『増補大成』に部分的であれ影響を受けて記されている。これらのことから、『極楽花の旅日記』は、遍路日記の性格も併せ持つものと考えることができるのではないだろうか。このような観点で見れば、F『散る花の雪の旅日記』やH『旅日記法農桜』等、これまで遍路日記として認識されていなかったものも、同様に遍路日記としての側面も持つ「旅日記」であると見ることができるのである。弥蔵の「旅日記」の例は、多様な遍路日記の存在を示唆するものであるいえよう。

おわりに

本稿は、遍路日記の著者である酒井弥蔵に即して、弥蔵が書いた遍路日記の特徴を考察した。

弥蔵は、これまで遍路日記と呼ばれてきた『さくら卯の花旅日記』を含む一一部の「旅日記」を記していたが、そこには、日付・地名・距離・費用・川渡しや難所の有無等、当時の道中日記によく記される項目とともに、序文や折々に詠んだ俳諧が記された紀行文のような文芸作品的な要素も含まれていた。遍路日記『さくら卯の花旅日記』は、他の「旅日記」と基本的に記載項目は同じであり、俳諧や名所旧跡への関心が強く表れていることも他の「旅日記」と同じであった。このことは、近世の旅の中で四国遍路がきわめて特殊であるという訳ではないことを示唆するものといえよう。

一方で、『さくら卯の花旅日記』では、弘法大師の「御修行の御跡を慕」って霊場を巡拝するという意識を強く持って、右に挙げる各項目が記されていた。このことは、『さくら卯の花旅日記』の遍路日記としての性格を端的

に表すもので、四国霊場巡拝意識（行動）とも言うべきものを伴って作成された諸記録を遍路日記と呼ぶことができるのである。このような規定は自明のことのようではあるが、この点を自覚化することは遍路日記を見つける際の手がかりとなり得るという意味で重要性を持つと考える。すなわち、これまで遍路日記として認識されていなかった弥蔵の「旅日記」を見ると、弘法大師への信心を意識した記述があったり、四国八十八ヶ所に含まれる複数の札所を参詣したことを記したものが含まれていた。このような「旅日記」も、遍路日記としての性格を併せ持つものと捉えることができるのである。これまで、遍路日記は九点か十点程度しかないとも言われてきたが、本稿の検討からは、遍路研究の検討対象となる史料の幅を広げ、その基礎的研究を積み重ねていくことが必要であることが明らかになったと言えよう。

加えて本稿の検討により明らかになったのは、『さくら卯の花旅日記』に見られるような霊場巡拝意識に関する記述の背景に、四国遍路の道中案内記『四国偏礼道指南増補大成』の強い影響があったことである。近世の道中日記は、本屋等から刊行された道中案内記等の書物に強く規定されて書かれ、次に旅に赴く者への情報提供という役割も果たしていたという指摘がある。[44] 四国遍路の道中日記である遍路日記も、同様のことが言えるのである。

遍路日記は、先行研究が示すように遍路の旅の実態や、遍路特有の順拝意識（詠歌や札打ち、接待に関する記述等に示されるような）等を読み取れ、遍路研究の進展にとって今後も掘り起こすべき重要な史料である。近世の一般的な道中日記の特質を意識しつつ、各々の遍路日記の特徴にも注意しながら、発掘していく必要があるだろう。

【註】

(1) 道中記については、現在では五街道や主要な名所の簡単な情報を含み、且つ携帯に容易な小型な出版物と認識されている（原淳一郎「近世寺社参詣史の現状と展望」（『原淳一郎・中山和久・筒井裕・西海賢二『寺社参詣と庶民文化』岩田書院、二〇〇九年）、山本光正「旅行案内書の成立と展開」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一五五、二〇一〇年）等）。

(2) 道中日記の史料としての特質を論じた塚本明「道中記研究の可能性（『三重大史学』八、二〇〇八年）は、かつ

ては道中記と呼ばれる史料には、旅人が実際に著したものと、本屋などが刊行・販売し、旅の便宜に供されたものとを混用していたことから、前者を道中日記、後者を道中案内記として区別して表記した。本稿もこれに従って記す。

(3) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」（『交通史研究』一三、一九八五年）。なお、①は文芸作品のような紀行文のような性格を持ちながら、「日付と費用のほか、訪問先と宿泊先を記す道中日記の狭間にあって、紀行文か道中日記か明確に区別をつけがたい作品」（原淳一郎『江戸の旅と出版文化』三弥井書店、二〇一三年）と言われるものと近いものと思われる。山本氏の分類の②③が道中日記の中核をなすものと言えよう。

(4) 前掲註(2)塚本論文等

(5) 前掲註(3)山本論文、桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」（『駒沢史学』三四、一九八五年）、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―」（『筑波大学 人文地理学研究』一四、一九九〇年）、岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学研究』（名著出版、一九九二年）、田中智彦『聖地を巡る人と道』（岩田書院、二〇〇四年）、高橋陽一「多様化する近世の旅―道中記にみる東北人の上方旅行」（『歴史』九七、二〇〇一年）等

(6) 旅の習俗をめぐる研究は主に民俗学の立場からなされている。全てを挙げることはできないが、例えば真野俊和『旅のなかの宗教』（日本放送出版協会、一九八〇年）、同『近世遊行宗教論』（吉川弘文館、一九九一年）等。女性の旅については深井甚三『近世女性旅と街道交通』（桂書房、一九九五年）、柴桂子『近世おんな旅日記』（吉川弘文館、一九九七年）等。

(7) 難波信雄「道中記にみる近世奥州民衆の芸能知識と伝承」（『東北文化研究所紀要』二六、一九九四年）、落合延孝「旅を通して見た幕末の日本」（同『幕末民衆の情報世界』有志舎、二〇〇六年）、原淳一郎『近世寺社参詣の研究』（思文閣出版、二〇〇八年、特に第六章「鎌倉の再発見と歴史認識・懐古主義」）、青柳周一「近世における地域の伝説と旅行者」（笹原亮二編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学―』思文閣出版、二〇〇九年）、鈴木理恵「旅の学び」（同『近世近代移行期の地域文化人』塙書房、二〇一二年）等

(8) 内田九州男「公開講演 コメント」（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会『二〇一三年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』二〇一四年）。内田氏によれば、「四国遍路の道中記

を私どもは遍路日記と呼んでいます」とある。内田氏のいう「道中記」とは、「巡礼者自身が筆記した記録」と述べていることから、いわゆる道中日記のことを指しているものと考えられる。

(9) 前掲注(8)内田コメント

(10) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、一九八二年）。新城氏の研究は、四国遍路以外の寺社参詣も取り上げ、それと比較しつつ、藩政史料や四国内外の村方文書等の多くの史料によって近世の四国遍路像を提示したため、総合的な研究成果と受けとめられ、定説とされている。

(11) 背景には二〇〇〇年から始まっている愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会の一連の成果（『四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』等）や、鳴門教育大学「四国遍路八十八ヵ所の総合的研究プロジェクト（『四国遍路の研究』一～三、二〇〇三～二〇〇六年）などがある。

(12) 近藤浩二「越中からの四国遍路―「道中小遣留帳」を素材に―」（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会『二〇一三年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』二〇一四年）、胡光「「遍路日記」に見る四国、その内と外と」（『同』）

(13) 佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』（人文書院、二〇〇六年）、井原恒久「四国遍路における接待の「援助性」―文政期・天保期を中心に―」（「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会『「現代の巡礼―四国遍路と世界の巡礼―」公開シンポジウム・プロシーディングズ』二〇〇七年）等

(14) 塚本明「公開講演 江戸時代の巡礼たちの諸相―熊野古道沿いの資料から―」（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会『二〇一三年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』二〇一四年）

(15) 須藤茂樹「古文書からかいま見る四国遍路」（『空海と遍路文化展』毎日新聞社、二〇〇二年）。「遍路日記を読む」という項目で「半田の庄屋（ママ）堺弥蔵も阿波二十三ヵ寺を巡礼した『さくら卯の花旅日記』（安政五年三月）などを記している」と紹介されている。

(16) 広島県福山市酒井氏蔵酒井家文書、文書の整理番号ナ01805～01910、ナ01836～01844に「万覚帳」あるいは「覚帳」と題した帳面がある。これらは弥蔵が他の商人から受けた注文等を主に記録したものであるが、この中に「旅日記」という項目がある。ここには商用のために日帰りで出かけたことも寺社参詣を目的にしたものも

「旅」と記され、旅における費目・費用を月日ごとに記している。なお、今回は徳島県立文書館にある紙焼き資料を使用した。

(17) 「参詣覚」とは、表題に「参詣覚」等がつけられた一連のものをここでは便宜的に言っている。徳島県立文書館寄託酒井家文書には以下の七部が現存している。ヰカイ00121「讃州象頭山参詣覚」、ヰカイ00140「神社佛閣参詣所覚帳」、ヰカイ00074「神社佛閣参詣覚」、ヰカイ00133「神社佛閣参詣覚」、ヰカイ00109「象頭山五岳山参詣覚帳」、ヰカイ00073「神社佛閣参詣覚帳」、ヰカイ00134「神社佛閣参詣覚帳」

(18) 拙稿「四国遍路の巡礼地域住民に見る旅の文化」（『旅の文化研究所 研究報告』二四、二〇一四年）

(19) 「徳島県立文書館特別企画展 芭蕉をめざした男―酒井弥蔵の旅日記―」（徳島県立文書館、二〇〇八年）。

(20) 徳島県立文書館『酒井家文書総合調査報告書』（一九九七年）で取り上げられている。

(21) 本稿で使用する酒井家文書は、徳島県立文書館に寄託された一八〇四点（文書の整理番号ヰカイ00001～01804）と、広島県福山市に居住されている所蔵者酒井氏宅に四七〇二点（同ヰカイ01805～06506）がある。以下、酒井家文書中にある史料は特に断りがない限りヰカイ＋番号で示す。

(22) ヰカイ03252「左海屋系図上」。この中に弥蔵が慶應元年に書いた「堺屋先祖早繰系図」が収められている。

(23) 「阿波国村々御高都帳」（『阿波藩民政資料』徳島県物産陳列場、一九一四年、六二二頁に所収）

(24) 「半田村夫役御改下調帳」（半田町誌出版委員会『半田町誌』上巻、一九八〇年、五一〇頁に所収）

(25) 半田村には近世中後期頃から台頭した敷地屋系・木村系という二系統の大商人が存在した。漆器・質・酒造・油締・米穀等の主要商品を取扱い、また、半田村における俳諧・石門心学等の文化的活動の中心的役割を果たしていた。敷地屋兵助は敷地屋系の商人である。

(26) 真貝宣光「酒井弥蔵の生業について」（徳島県立文書館『酒井家文書総合調査報告書』一九九七年）

(27) 半田町誌出版委員会『半田町誌』下巻（一九八一年）、徳島県立文書館「第十一回企画展［酒井家文書総合調査］江戸時代人の楽しみ―旅・俳句・芝居―」（一九九六年）

(28) ヰカイ00081「見る若葉聞く郭公旅日記」、ヰカイ00082「見る青葉聞く郭公旅日記」、ヰカイ00083「弘化二年乙巳春中旅日記」、ヰカイ00084「仏生会卯の花衣旅日記」、ヰカイ00141「踊見旅日記」、ヰカイ00085「散る花の雪の旅日記」、ヰカイ00086「出向ふ雲の花の旅」、ヰカイ00084「旅日記法農桜」、ヰカイ00088「極楽花の旅日記」、ヰカイ00080「梅の花見の旅

日記」、キカイ00254「さくら卯の花旅日記」

(29) 前掲註(27)徳島県立文書館「第十一回企画展」

(30) キカイ01810「覚帳」。

(31) 前掲註(2)塚本論文

(32) 前掲註(2)塚本論文

(33) 前掲註(3)山本論文によると、庶民が記した旅日記には、①名所・旧跡に重点が置かれ、自作の歌などが詠み込まれているもの、②自己の行動を中心に記述したもので年月日・宿泊地・費用及び若干のコメントが記してあるもの、③諸経費を中心としたものに分類されるという。この分類にしたがえば、弥蔵の「旅日記」は、一見すると、①に分類されようが、本節の検討を踏まえると①～③いずれも兼ね備えた内容であると見ることができる。

(34) なお、俳諧・狂歌については「口合狂歌発句之部」という項目を立て、何日に、どのような場所・状況で詠んだものか分かるように記している。

(35) キカイ00965「俳諧雑記」巻二

(36) 費用や費目については、「諸入目覚」という項目を立てて月日ごとにまとめて記してある。

(37) 前掲註(12)胡論文

(38) 上板町史編纂委員会『上板町史』下巻（一九八五年）。弥蔵がここで源義経の旧跡に関心を示しているのは、源平合戦に関する歌舞伎・浄瑠璃を繰り返し見ていたことも関係していると考えているが、この点は別稿を期したい。ただし、『上板町史』下巻によると、大山寺は真言宗寺院であり、弘法大師との関係も深いと伝えられていることから、弥蔵が大山寺へ赴く理由は弘法大師関係の旧跡を訪れるという可能性があることも考慮に入れなければならない。

(39) キカイ03241「四国偏礼道指南増補大成」。文化十二年十一月求板、大坂心斎橋南江五丁目佐々井治郎右衛門版。

(40) 近藤喜博『四国霊場記集別冊』（勉誠社、一九七四年）。

(41) 引用は長谷川賢二「弘法大師信仰・巡り・霊場ネットワーク」（徳島県立博物館『空海の足音 四国へんろ展［徳島編］』四国へんろ展徳島実行委員会、二〇一四年）。『四国辺路道指南』に早くから注目した近藤喜博『四国霊場記集別冊』（勉誠社、一九七四年）には、「遍路のガイドブックとして『四国辺路道指南』は、江戸期を通して、その右に出ずるものがない。名ガイドブックである。それだからして、以後のものもすべてこれに準拠して遍路案内書は編まれてきた」とある。『四国辺路道指南』についての近年の研究として、稲田道彦「最初期の四国遍路ガイドブック「四国邊路道指南」と「四国偏禮道指南」の相違について」（『香川大学経済論叢』八五-一・二、二

〇一二年）がある。

(42) 『四国偏礼道指南増補大成』についての近年の研究は喜代吉榮徳「『四国偏禮道指南増補大成』本について」（『善通寺教学振興会紀要』一三、二〇〇七年）、内田九州男「再論：四国遍路と作法の変遷」（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼研究会」『二〇一一年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・研究集会プロシーディングズ』二〇一二年）等。内田氏は、四国遍路の作法に関わった記述をもとに、『四国偏礼道指南増補大成』の諸本を比較している。

(43) 前掲註(2)塚本論文

(44) 前掲註(2)塚本論文